狭衣物語

上〈蓮空本〉

吉田幸一編

古典文庫

狭衣物語

上〈蓮空本〉

吉田幸一編

古典文庫

古典文庫第96冊

昭和五十六年九月二十日再版発行　　非売品

狭衣物語
(蓮空本)
<上>

編者兼発行者　吉田幸一

印刷者　帝都印刷製本株式会社

発行所　114 東京都北区西ヶ原三ノ三四ノ一二
古典文庫
電話(九一〇)二七一七
振替口座東京九一一四五九七番

不許複刻

凡　例

一、古典文庫本の一として、「蓮空本狭衣物語」四卷を飜刻する。

一、蓮空本は、蓮空自筆の卷一、二を傳へ、天理圖書館に現藏されてゐる。それ故卷一・二は蓮空自筆本を底本とした。卷三・四は蓮空自筆本が傳はらぬから、轉寫本たる學習院本を底本とした。

一、本書は、底本本文を忠實に飜刻することに努めたが、印制上の都合を考慮して左の如き私意を加へた。

イ、漢字の草體・假名の異體字等は通常の活字體に統一した。しかし假名遣の誤などは原文のまゝとした。

ロ、適宜に章段を設け　和歌は別行二字下げとし、歌には順番號を下に附した。

ハ、濁點、句讀點、會話符號「　」等を新たに施した。

ニ、底本における見セ消チ・傍書は原文のまゝを示した。

ホ、誤寫、誤脫と思はれる不審箇所には、右傍に（マヽ）として原文のまゝを示し、又意味上斯くあるべしと思ふものには、右傍に（〇〇カ）として私案を記した。

ヘ、底本（原本）の虫喰個所は學習院本により補つた。

一、蓮空自筆本を飜刻するに當り、天理圖書館並に、中村幸彦、中村忠行、木村三四吾諸氏には一方ならぬ御世話になつた。殊に中村忠行氏には最終の校正を原本と對校していたゞき、校正に萬全を期すこが出來たのはこの上ない幸せであつた。記して諸氏の御援助に對し厚く御禮申上げます。

昭和三十年七月

吉田幸一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

さごろも　巻一　〔蓮空本〕

せうねんの春おしめど。とまらぬものなりければ、やよひの廿日あまりになりぬ。御まへのこだちなにとなくあをみわたりて、なかじまのふぢはまつにとのみも思はずさきかゝりて、山ほとゝぎすまちがほなる、いけのみぎはのやへ山ぶきは、ゐでのわたりにことならずみわたさるゝを、ひかる源氏の身もなげつべくと、のたまひけんもかくやなど、ひとりみ給もあかねば、さぶらひわらはのおかしげなるして、ひとえだおらせ給て、源氏の宮の御かたにもてまいり給へれば、中納言、中將などやうの人々さぶらひて、宮は御てならひ、ゑなどかきす

さみてそひふさせ給へる。「このはなの夕ばへこそ、つねよりもおかしうみえて、とう宮の、『さかりにはかならずみせよ』とのたまはするものを、いかで御らんぜさせてしがな」とて、うちをかせ給に、宮すこしをきあがり給て、みやらせ給へるまみ、かしらつきのうつくしさは、はなのにほひ、ふぢのしなにもこよなくまさりてゑみ給へれば、れいのむねうちさはぎて、はなにはめもとまらず、つくづくとまもられ給へり。「とりわき、はなこそ春の」との給。山ぶきをてまさぐりにし給御てつき、いとどもてはやされて、いひしらずうつくしげなるを、人めもしらず、わが身にひきそくまほしうおぼさるゝさまぞいみじきや。「くちなしにしもさきそめけん、くちおしき心のうち、いかにくるしからん」との給へば、中納言君、「さるは、ことのはゝ

おほく侍るものを」といふ。

いかにせんいはぬ色なる花なれば心のうちをしる人もなし（ぞき）

と思ひつゞけられ給へど、げに人もしらざりけり。「たつをだまきの」

とうちなげかれて、もやのはしらによりゐ給へる御かたちぞ、猶たぐひなくみえ給に、よしなき人により、さばかりのめでたき御ありさまを、むろのやしまのとのみ思こがれ給さまぞ、いと心ぐるしきや。

さるは、このけぶりのたちずまゐ（たち）、しらせたてまつらんをよびなく、いかならんたよりにてなどおぼしわづらふにはあらず、たゞ二葉よりつゆばかりのへだてなくおいたち給て、おやたちをはじめ、よその人々など、みかど春宮ひとついもせとおぼしたる、われはわれとかゝる心のつきそめて、思わびほのめかしても、かひなかるべきものから、

あはれに思ひかはし給へるに、おもはずなる心のありけるよとおぼしうとまれこそはせめ。大殿のはゝ宮なども、ならびなき御心ざしといひながら、この御事は、いかゞはせん。さらばさてあれかしとはよにまかせ給はじ、よの人きゝ思はん事も、むげに思やりなくけしからずあるべきかなと、とざまかうざまに世のもどきになりぬべければ、かた〳〵にあるまじき事と、ふかくおもひしり給ふにしも、あやにくに心のうちはくだけまさりつゝ、つゐにいかにか身もなしはてんと、心ぼそきおりがちなり。いまはじめたる事にはあらねど、なを世の中にさらでもありぬべかりける事は、あまりよろづにすぐれ給へらん女の御あたりに、まことの御せうとならざらんおとこは、いみじうともむつまじうはおほしたて給まじきわざなりけれど、はやうはなるすみの

じゝう、さいしやうの中將などやうのためしどもゝなくやは。まして
これはことはりぞかし。いはけなくより、人にもにずめでたき御あり
さまを、やう〳〵物の心しり給まゝに、かゝらん人をこそ我ものには
せめ、これにおとりたらん人をばみじとのみ、おぼししみにければ、
とかく人をみあつめ給まゝに、いとかくしもつくりをきこえけんむ
すぶの神さへぞ、うらめしくおぼさるゝ。
この比、ほりかはのおとゞときこえて關白したまふは、一條院のたう
だいなどのひとつきさい腹の、二のみこぞかし。はゝきさきもうちつ
ゞきみかどの御すぢにて、いづかたにつけても、をしなべておなじ大
臣ときこえさするもいとかたじけなき御身のほどなれど、なにのつみ
にかたゞ人になり給にけれと、故院の御ゆいごんのまゝに、うちかは

り、みかどはたゞこの御心に世をまかせきこえさせ給て、いとあらまほしくおぼしめす御ありさまどもなり。二條ほり河のわたりを四五ちやうつきこめて、三かたにへだてつゝつくりみがゝせたまへるたまのうてなに、きたのかた三人をぞすませたてまつらせ給ける。堀川二ちやうは、やがて御ゆかりはなれぬこせんだいの御いもうと、ぜんさい宮おはします。あまたの御中にやごとなくしつらひたり。うち〳〵の御心ざしもすぐれてぞおはします。とう院には、たゞいまのおほきおとゞの御むすめ、一條院の后の宮の御おとゝ、春宮の御をば、世のおぼえうち〳〵の御ありさまはなやかにいとめでたく、坊門には、兵部卿宮の御子ときこえし御むすめぞ、中には我もてなしよりほかには心ぐるしかるべけれど、女君のよにしらずめでたき、ひとゝころうみた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

てまつらせ給へりけるを、うちにまいらせたてまつり給て、たゞいまの中宮ときこえさす。今上、一の御子さへむまれさせ給へるいきほひ、中〳〵すぐれめでたくゆゝしく、するまでたのもしき御ありさま也。ついぢをへだてゝうちかよひつゝ、殿はみたてまつり給。

かゝる御中にも、齋宮をば、おやかたにも、又御心ざまも、なべてならずすぐれ給へるにしも、かくよにありがたきおとこ宮たゞひとり物したまふを、いかでかは世のつねにおもひきこえさせ給はん。あまたものし給はんにてだにいとかゝらんをば、おやの御めにも、いかでかすぐれておぼさゞらんとみえ給。この比、御年いま廿にふたつみつばかりやたりたまはざらん。二位中將とぞきこえさする。なべての人も、かばかりにては、大納言にもなり給めるは、されど、この御あり

さまの、此世の人ともみえ給はず、いとゆゝしきに、おぼしおぢたるべし。いでいりにめをつけて、心をそへきこえ給へるさまなど、御心のいとまなげなり。雨風のあらきにも、月日のひかりにあたり給も、いま〳〵しう、おほふばかりのそでのいとまなく、あまりこちたき御もてなしどもを、をとなび給まゝには、ありぐるしく、うきはたのまれぬべき心ちのみして、おぼさるゝおり〳〵もあるべし。又よの中の人、みかどよりはじめたてまつりて、たかきもくだれるも、この御かたちの御身のざへなどを、あまりなるわざかなと、あやしく、これやこの世のしゆじやうのために、あみだほとけのあらはれさせ給へるにやと、あめのしたのめでたさになり給へり。いひしらぬしづのおだに、みたてまつりては、我身のうれへもみなわすれて、おもひもなき心ちし

つゝ、涙をこぼすもおほかり。ましてことはりなるをやたちの御心ざしどもには、ゆめばかりもあはれをかけ給はんかげのこくさなどをも、このやうにをしなべてみだりがはしく、あは〳〵しき御心さへぞなかりける。いかなるにか、この世はかりそめに世界ふらうことのみおぼさるゝは、げに世の人のことぐさに思ひきこえさせたるやうに、佛のあらはれさせ給へるにや。人よりは物すさまじく、くちおしきかたに思ひきこえさせたる人もあるべし。まれ〳〵一くだりもかきすさみ給へるみづくきなどを、めづらしくうちをきがたきものにおもふ人おほく、なをざりのゆくての一ことばも、身にしみておかしくいみじと心をつくし、ましてちかき程の御けはひなどをば、ちよを一夜になさまほしく、鳥のねつらきあかつきのわかれにきえかへり、いりぬる

いそのなげきを、ひまなく心をのみつくす人々、たかきもいやしきもさまゞ〳〵、いかでかをのづからなからん。いとなべてならぬあたりには、なだらかにもてなさせ給て、おりにつけたる花紅葉、霜雪、雨風につけても、あはれまさりぬべき夕ぐれ、曉のしぎの羽風などにつけつゝも、おもひかけずいづれにもをとづれ給事は、かげろふにをとらぬおり〳〵もあるに、中〳〵いなぶちのたきもさはぎまさりて、いそぶりにもなりぬなんめり。さこそまめだち給へど、なをこのあくせにむまれ給へばにや、たゞひきすぎ給ふみちのたよりにも、すこしゆへづきたる山がつのかきねのなでしこは、をのづからめとゞめ給はぬにしもあらぬほどに、ましてすみれつみには、野をなつかしみたびねし給ふあたりもあるにや、いかなるおりにか、梵網經にも「一見於女

人」との給へる事おぼしいづれば、御くるまのすだれうちおろし給へれど、そばのひろくあきたるは、えたて給はざるべし。ひかりかゞやき給へる御かたちはさる物にて、心さへまことしき御ざへなどは、こまもろこしにやたぐひあらん、この世にはいまもむかしもためしなくぞものし給ける。てかき給ふ事も、いにしへの名たかゝりける人〳〵のあとは、ちとせふれどもかはらざりけるに、みあはせ給ふにも、時にしたがふにや、たをやかになつかしう、いまめかしきさまは、ことのほかにまさり給へりと、さだめられ給めり。又、ことふえのねにつけても雲ゐをひゞかし、この世のほかまですみのぼり、天人もおどろかし給へけ(マヽ)れば、いとあまりゆゝしくおやたちおぼしたちて、おさ〳〵せさせたてまつり給はねば、我もことに心をとゞめて、なに事を

もしたまはずなどあれば、よろづにすさまじき人ざまにやとをしはかられて、なに事もいひつゞくれば中〳〵なり。

源氏の宮ときこえ給は、故先代の御すゑの世に、中納言のみやす所ときこえし御はらに、たぐひなくうつくしき女宮むまれ給へりしを、すゑにならせ給へる、いまさらほだしとおぼしめしゝほどに、宮三にならせ給し年、院もはゝ宮すどころもうちつゞきかくれ給にしかば、いと心ぐるしくて、この齋宮むかへとりきこえ給。とのもまことの御むすめよりは、いますこし心ぐるしくやんごとなき事をそへて、おもひきこえさせ給へり。十に四五あまらせ給へる御かたちの、ほのみたてまつらんものゝふなりとも、やはらぐ心はつきぬべきを、中將の御心のうちはことはりぞかし。われもおさなくおはせしをりは、かたみにか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton